

政治経済学としてのマルクス経済学へ

世界資本主義フォーラム共同代表 矢沢国光

[1]世界資本主義フォーラムは、岩田弘さんの提唱で「国家と資本主義のトータルな破棄」をめざす研究者・実践家のためのフォーラム、つまり広場として(岩田先生の没後の2012年)始まりました。伊藤先生には、フォーラムの顧問をしていただきました[伊藤先生の後には河村哲二先生]。

このフォーラムで、昨年12月、伊藤先生を講師として全6回の連続講座「マルクス経済学と現代世界——現代世界の歴史と現状を認識する上で、『資本論』がどのように役立つか」をスタートさせました。

この講座には20名以上が参加し、その大半は、大学に籍を置くような研究者ではなく「実践家」でした。

この連続講座では、伊藤先生の『入門 資本主義経済』(平凡社2018)をテキストにしましたが、初めての試みとして、伊藤先生に「講義してもらって、参加者が質問する」という形式をやめて、「演習形式」にしました。これはあらかじめ設定した「設問」、たとえば「商品には価値と使用価値の2要因がある。使用価値はあるが価値のないもの(商品ではないもの)の例をいくつか挙げよ」のような「設問」に対して、参加者が「回答」を書き、これに対して、伊藤先生が一つ一つコメントする、というかたちです。

そのようすはzoomの録画を見ていただきましたが、世界資本主義フォーラムのサイトに文字起こししたものがアップしてあります。

https://www.worldcapital.online/_files/ugd/eaeae1_8782ef718ad64070bae301430472c97e.pdf

この「演習形式」は、大成功でした。伊藤先生は、どんな初歩的な質問・疑問に対しても、最新・最高のレベルで答えてくれました。話し言葉だから、書いたものを読むよりわかりやすい。

第1回を終えて、参加者一同、「マルクス経済学を伊藤先生の講座で本気で学習しよう」という気になり、2月18日の第2回講座を楽しみにして準備を進めていました。まさにそのとき、伊藤先生の突然の訃報に接したのです。「マルクス経済学を伊藤先生と一緒に学習しよう」と盛り上がった気持ちが、行き場を失いました。

[2]考えてみると、伊藤先生は、どうしてわたしたちのような「実践家」のために、大きな時間と労力を割いてくださったのか？

伊藤先生の回想(註)によると、当初は、宇野弘蔵の「イデオロギーと経済理論は別」という考えに勇気づけられた——実践から離れたマルクス経済学があってもよいのだ——と、語っています。

伊藤先生がマルクス経済学と実践の関係についての考え方を転換したのは、1968年、ベトナム反戦闘争、パリ五月革命などで突然よみがえった西欧のマルクス経済学——マルクス・ルネッサンス——との出会い/欧米の研究者との交流が大きかったようです。「ニューヨークを訪れるたびにスウィーギーに会うのがたのしみとなっていた」とも語っています。

(註)講師・伊藤誠の連続講座「『資本論』と現代世界」(全6回)で、語られています。この6回の連続講座のテキストは、社会主義協会の雑誌『科学的社会主義』に掲載された文章で、9.2 伊藤誠先生を偲ぶ会の参加者に贈呈された伊藤誠先生の遺著「『資本論』と現代世界——マルクス理論家の回想から」(青土社2023.9)に収録されています。

第1回(2021年11月27日)「1968 革命」とマルクス・ルネッサンス

- 第 2 回 (2022 年 1 月 15 日) 現代資本主義の危機と恐慌論
- 第 3 回 (2022 年 3 月 26 日) ソ連・東欧体制の崩壊と社会主義論
- 第 4 回 (2022 年 5 月 28 日) サブ・プライム恐慌と金融化資本主義
- 第 5 回 (2022 年 7 月 23 日) 新自由主義と新古典派経済学
- 第 6 回 (2022 年 9 月 24 日) 自然環境問題とマルクス理論

[3]1968 マルクス・ルネッサンスで台頭した欧米のマルクス経済学者との出会いは、伊藤先生のマルクス経済学を「現代世界の現状の批判的考察」へと向かわせた。

その頂点が、ギリシャの研究者コスタス・ラアパヴィツァスとの出会い(1994年)と共著『貨幣・金融の政治経済学』(2002岩波)ではなかったか(連続講座第4回)。

伊藤先生が2007年、ロンドンでコスタスに再会したのは、アメリカ発の世界金融危機がまさに始まった時期でした。コスタスは、ギリシャでEUの緊縮財政の強要に反対し、急進左派連合(シリザ)の緊縮政策反対への重要な論拠を与え、2015年の総選挙でのシリザの勝利とその政権成立に貢献し、コスタス自身もギリシャの国会議員になりました。まさに、マルクス経済学による現状分析が実践を支えたのです。[コスタスはその後、シリザ権の緊縮政策容認で議員辞職。大学に復帰]

伊藤先生のコスタスとの共著の表題は『貨幣・金融の政治経済学』となっています。「政治経済学」がタイトルに入っている著作は、ほかには、1冊だけです(『マルクスの逆襲—政治経済学の復活—』(共編 野口真・横川信治, 日本評論社)。マルクス経済学は、資本主義を廃絶するための資本主義の分析——政治経済学 political economy——でなければならない、という伊藤先生の思いがこの表題に込められているのではないか。

本日、こうして、マルクス経済学の研究者のみなさんと、実践家のみなさんが一堂に会したのは、伊藤誠先生の引き合わせです。

理論のための理論ではなく、また、理論の欠けた実践ではなく、政治経済学としてのマルクス経済学によって資本主義世界を認識し、資本主義と国家の廃絶に向けて、ともに進んでいきましょう。